
真相2

紅煉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真相2

【Nコード】

N6685B

【作者名】

紅煉

【あらすじ】

双葉が私の携帯に電話をしてきた知らない女の子が入ってきたと、急ぎ向かう私の前に恐るべき光景が広がっていたそれより私を恐怖させたのは彼女は清水美希と名乗った事だった…

一話 恐怖の再臨

1 / 27

「私は生まれた。私を生んだ男は藤田と名乗った」

藤田

「いやあ、君は私の娘にプレゼントをくれたんだ
本当にありがとう。」

僭越ながら私から君にプレゼントをあげたよ。

…………… 美希ちゃん」

彼女の名前は清水美希

罪状 殺人

被害者 酒井双葉

私はまた真相を追う事になってしまいました。

谷

「倉田先生！大丈夫だったんですか？」

私

「ええ、大事ありません。しかし…」

谷

「酒井双葉が被害者だったそうですね？」

私

「間に合いませんでした」

谷

「先生のせいじゃありませんよ、しかし彼女は何者ですか？」

私

「彼女は清水美希と名乗りました」

谷

「清水美希……」

「は！もしかして、あの……」

彼が驚くのも無理は無かった、清水美希と言う名を私達は知っていた

私

「はい、一葉の体となった子の名前ですね」

谷

「そんな……まさか！清水美希は一葉の体になって死んだのでは？」

私

「私だって、そう思いたくはありません！

しかし彼女がやっと返してもらえたと言っていました。」

谷

「しかし！」

私はまた気付いてしまいました、何故警察の方は気付かないのだろう

私

「彼女の体を見てください。女の子の体にしては肩幅が広すぎます
きつと……」

谷

「男の体という事ですか？」

私

「おそらく、そうでしょう…」

谷

「また何か始まるのでしょうか？何故ですか？
一体どれだけの人が犠牲になれば良いのですか？」

彼は怒りというより悲愴感が漂う程絶望していた

私

「私はまだ解放されないのですね…
何故、藤田先生はこんなにも手術に執着したのでしょうか？」

気落ちする私達に声を掛けてきた人がいた

渡辺

「谷！……倉田先生？」

私

「ご無沙汰しています。」

渡辺

「本当に久しぶりですね。」

私

「あの事件以来、私は警察の精神鑑定から悉く外されてきましたからね、本来多い事ではないので」

渡辺

「すみませんでした、我々の力不足で」

私

「ええ、大丈夫です。ですが今回はさすがに協力させて頂かなくてはなりません」

渡辺

「それは…」

谷

「一緒に捜査しましょう！」

先輩、一葉の事件のときはクビ覚悟で先生と捜査したじゃないですか？いいですね？」

私

「ふふ、随分逞しく成長なさいましたね」

渡辺

「最近じゃ私の指示など何処吹く風ですよ
分かりました、行きましょう先生！」

私

「はい」

私には知る義務があります。

必ず真相を掴んで見せます。見ていてください、双葉

二話 一葉の戸惑い

また真相を追う事になった私：

ですが私には会っておかなければならない者が居ました

「245番！面会だ！」

一葉

「はい！」

私は悩んでいました。

何と一葉に説明したらよいのかと：

一葉を待つ時間は凄く長く感じました。

「時間は分かっているな、おとなしくしろよ」

一葉

「はいはい、分かってますよーだ

先生、久しぶりね」

久々に会った一葉はすっかり明るく普通の女の子と変わらなくなっていた

私

「や、やあ。久々だね」

一葉

「どうしたの？何かあった？」

私

「いや、何も」

話せない、話せる訳がない。一葉が今こうして明るく居るのは双葉と暮らす事を夢見ての事だろう

一葉

「ふーん、何かあったんだね？」

私

「何もない、本当だよ。」

一葉は私の顔をじつとみて、人差し指をそつと自分の眉間に当てた

一葉

「シ・ワ！」

先生ってね、嘘つく時眉間にシワが寄るんだよ。」

とつさに私は自分の眉間に人差し指を当ててみた

一葉

「やっぱり何かあったんだ？シワなんか寄ってないよ。

先生も未熟ね、患者の私に騙されるなんて」

私

「患者ではないだろう？私は一葉の保護者だ」

一葉

「はは、そうだった。

そうか！何かあったって事は双葉の事ね？

どうしたの？私に早く会いたって泣いてる？」

私は言葉を返すことが出来なかった

一葉

「やだ、冗談よ！怒った？」

久々に会えたから嬉しくて、先生？何か言ってよ」

今にも泣きだしそうな一葉の声に、やっと決心が固まった

私

「一葉、落ち着いて聞いてほしい。

双葉は先日亡くなりました。」

一葉

「先生、冗談きついよ。どうしてそんな事言うの？」

私

「残念ながら本当です。当日、私の携帯に双葉から着信がありました。ひどく怯えた様子で、知らない女の子が入ってきたと…

すぐに向かいましたが、間に合いませんでした。

腑甲斐ない保護者で申し訳ありません。」

頭を下げた私に、一葉はこう声を掛けてきた

一葉

「双葉、死んじやったんだ…

殺されたのね、清水美希に」

私は驚いた、何故一葉は清水美希の事を知っていたのか

私

「何故それを？どうして清水美希の事を？」

一葉

「分かるのよ、私の首から下は清水美希という子の体なんでしょう？この体から、お父さんに対する憎しみが、そして私に対する憎しみが沸き上がってくるみたい
きっと双葉は私と間違われて殺されたのね…」

そう言うと、一葉は顔を伏せ

わんわんと泣いた、自分の体が枯れるほど

面会時間は過ぎていたが、看守はその光景に話を止める事が出来なくなっていた

私

「一葉、私はまた真相を追うつもりです。

どうやら被害者はまだいるようなので」

一葉

「お父さんの日記…きっとそれに答えがある」

私

「日記？あの三冊には目を通しましたが問題ありませんでした」

一葉

「それは、私の育成日記だもん
書斎にあるお父さんの日記よ」

私

「分かりました。行って調べてみます。」

一葉

「先生？私は一体どっちなのかな？」

一葉と清水美希、どっちなのかな？」

私

「貴方に罪は全くありませんよ。貴方は唯一、酒井一葉という存在なのですから」

それを聞くと一葉は安心したように笑いました

一葉

「ありがとう先生。私は生きていてもいいんだね？」

私

「当たり前です。待っていますよ一葉」

一葉

「はい。」

一葉は涙を流しながら扉の向こうに行ってしまいました

一葉のように傷つき怯える子供たちが居る

私は、そんな子供たちの為に立ち止まる訳にはいかないのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6685b/>

真相2

2010年12月10日23時32分発行